

はじめに

我々人間や家畜など高等動物にとって、感染症との戦いは永遠の課題である。なぜなら、宿主である人間（や家畜）と感染症の原因となる微生物は、その長い進化の時間を経て、寄生または共生という接触を通じて相互に生存の戦略を確立してきたからであり、動物の世界と微生物の世界は、いずれか一方のみが繁栄し他方が消滅するという関係にはないからである。

地球規模の人間活動が急速に盛んになった近年、古典的な感染症に加え、手つかずの熱帯森林などの動物に由来するとみられる全く新しい感染症が先進諸国にも伝播する事態が続々と発生している。また、家畜と人間の関係を見ても、両者に寄生することのできる大腸菌のような細菌が遺伝的に変異した時、一方には無害で他方（ヒト）には致命的な食中毒性の感染症を起こすというような例もある。

現在、このような感染症の発生は頻々と起きるようになり、通常、衛生的な環境にある先進工業化社会は、その発生に際してパニック的な反応を繰り返している。

このように、動物とヒトとの間を相互に行き来して人間にダメージを与える感染症（ここでは人獣共通感染症と呼ぶ）は、科学的な解明と適切な行政的対応を要する極めて大きな社会的課題となっている。中でも、BSE、腸管出血性大腸菌 O157 などの教訓は、食品を介してヒトに感染する人獣共通感染症への対策が重要であることを示している。

人獣共通感染症の中には、野生動物または家畜等に由来してヒトに病気を起こすが、感染源の動物は食用とならないか、もしくは畜産食品を介しては伝播するおそれのないものと家畜に顕性・不顕性に感染し、食品を介してヒトに病気を起こすものがある。後者が畜産食品の安全性確保の上では特に重要なものであるが、前者についても、今日のヒトの動きと物流のグローバル化の下で、我が国に発生するリスクが常に存在しており、これに対する対策も推進させなくてはならない。

そこで、本調査事業では、今後これらの人獣共通感染症が我が国で問題となった際、必要な基礎的資料として活用できるよう、「畜産物等食品を由来とする人獣共通感染症の発生に係る緊急事態に備えた食品の安全性の確保に関して」の報告書をまとめた。その内容は、人獣共通感染症における病原体の畜産食品を介したヒトへの感染リスクについて、伝播様式、性質、地理的分布や食品に存在するリスク、日常生活との関連などの面からの科学的な知見をまとめた資料及び諸外国における食用家畜での発生状況やヒトへの感染事例、執られた対策・経済的影響・国民とのリスクコミュニケーションの状況や課題と教訓などについて調査を行い、我が国の状況と比較検討したものである。この報告書が、畜産物等食品を由来とする人獣共通感染症発生時の緊急時対応やリスクコミュニケーションに活用されることを期待している。